



【創立 50 周年内覧会 記念講演】

幼児教育は何を達成し何を作り出そうとするのか
～ 未来へと飛躍する園の保育とその経営とは ～

無藤 隆（白梅学園大学）

2023 年 11 月 25 日 14：00～15：00 於：学校法人野澤学園 東村山むさしの GROUP

■ 第一・幼児教育論

➤ ～中核の考えについて～

■ 第二・幼児環境論

➤ ～どういう環境への出会いが望まれるか～

■ 第三・幼児教育経営論

➤ ～どういう経営・運営によりその保育が教育として意味をなすのか～

◇ 園長、保育者等の役割と協働とその風土。

■ 第四・園の経営の維持可能性

➤ ～園としての維持可能性を確保するには～

◇ 子育て支援を超えた地域コミュニティとの結びつきとそこでの利潤の確保が必要であること。

【お礼のご挨拶】ご講演を受けて

学校法人野澤学園 専務理事・学園長 野澤 貴春

「行いたい教育保育」→「揃えたい環境」→「具現化するための園施策」→「今後の展開」

～ 実践と政策の両輪を胸に。振り返りとスタート ～



幼児教育は何を達成し
何を作り出そうとするのか
—未来へと飛躍する園の保育とその経営とは

2023年11月

無藤 隆（白梅学園大学）

1. 子どもの権利(自律性と共感性を両立できる力を養う)

- 幼児教育・保育は権利の考えの進展の中で生まれた。
- 個人の自律性の尊重から始まり、ついで、そのように自律していると見做されない人への共感を通して、内在的理解による人としての発見が広がる。
- そこに教育を及ぼすことはその権利の認識と権利行為主体の尊重と育成に至る。その幼児への適用が幼児教育であり、19世紀半ばに本格的に始まった。
- だから、幼児教育・保育はそもそもその権利の確保と尊重そしてその権利の実質的発揮への育成なのである。幼児教育・保育は、子どもの権利の実質化と呼ぶことができる。
- 実質化とは、幼児教育・保育が単に子どもに権利を認め、擁護するのではなく、権利の行使者としての権利の発揮を促し、その機会を用意し、それを通して、権利を発揮していく権利主体者の育成をその使命としていることである。
- その権利主体は権利の発揮を小さな規模で日々繰り返し行うことを通して可能にする。その育成目的が育成の手立てに組み込むことにしたこと。その自覚的な追求が現代的な幼児教育として成立したのである。

2. ウェルビーイング(現在の幸せの中に未来への芽生えを育てる)

- ウェルビーイングはすべての人がこの社会の中で市民として正当な権利を付与・尊重され、その発揮が保障されることだ。
- それは、人としての機能が十全に満たされることだが、そこには幸せであること、充実していること、学ぶこと、成長することが含まれる。それは何より人は過去を受け、現在を生き、未来へと希望を持っていく存在だからだ。常にそのポテンシャルティを少しでも実現して生きようとする。
- ウェルビーイングは、そのような状態であり、その実現を少しでも社会として助けようとすることだ。
- その一つが保育であり教育だ。当人にそうなっていく力と意欲と機会を提供するのである。
- どのようにしてか。小さな幸せと小さな未来と小さな旅立つ世界を提供することによってだ。その使命を子どもについて担うのが幼児教育・保育である。その小さな幸せで、何か発見し、考え、試し、目標を立て達成することを繰り返す、そこで楽しく、パワフルに、そして未来を作り出していく循環過程を保障することが乳幼児期の園という発明により可能となったのである。
- 園における子どものウェルビーイングの追求の小さな実現はその後の人生のための、今、真剣で同時に楽しく遊びに満ちた試行の場となったのである。

3. 幼児教育・保育はこの30年で発展を遂げて一つの完成形を作り出した

平成期(プラス数年)に日本の幼児教育に何が起きたのか。いろいろな点で質的量的な拡大が起きて、一つの完成を見たのである。それはいくつもある。

- 3歳以上の子どもはほぼ何かの幼児教育施設に通うようになった。
- 乳児保育を本格的に幼児の保育とともに一つの枠組みで捉えるようになった。
- 幼稚園、保育園、こども園が基本部分を共通のものとした。
- 幼児教育が小学校の準備ではなく、基盤であり、その基盤が小学校の始まりに引き継がれ、小学校の土台をしっかりと作り出す(と理解される)。
- 園での教育は子どもの世界そして子どもの生活の一つひとつの小さな関わりからなり、それらがつながり学びとなり、その先へと発展するのである。
- 乳幼児期の学びは遊びから始まり、それは楽しいことから学びとなる。そこで工夫して、何かを作り出す。

- 心情が基盤中の基盤で始まりであることが再確認され、その環境との出会いからの感情からそれが好きになり、それとともに知的な理解が進んでいく。
- 粘り強く取り組み、努力することは、その先になって、長い目での展望が見えていく中で可能になっていく。
- 保育料の無償化により、幼児教育が公的教育の始まりであることが明確になった。
- 共働きが増え、その子どもを預かる保育所・こども園が拡充されまた幼稚園の預かり保育も広がり、長時間保育(8時間を超える)が多数になった結果として、園での生活がどうあるかが重みを持つようになった。
- 保育者の処遇の改善が進んできた。小学校教員並みにはまだ及ばないが、とくに大都市圏では近づきつつあるし、10年前後以上の経験者の改善も動いている。
- 研修の拡充が進んだ。保育者への研修の機会は大幅に増加した。またリモートにより多くの人を受講するようになった。やり方もより実践的になっている。

上記のことがすべてに普及し、賛同を得て、実践されているということではない。ただ、それらが肝心で目指すべきことだということがおおむね了解されたことに重大な意味がある。

4. 21世紀（の最初の30年間）における幼児教育・保育の根幹とは

- 環境を通しての保育を基本原理とする。
- そこに置かれた・存在する・生起する物・人・ことへの個別的関わりがその内実である。
- その関わりはその個々のもののもたらず魅力（呼びかけと呼びたい）との出会いによる。そこで起こる関わりのあり方を主体的な活動と呼ぶ。
- そこに能動性と受動性という軸を入れると、受動性において環境に様々なものに感性が開かれていくと同時に、特定の人・場所・ものとの関係において情緒の安定したあり方が確保されることに気付く。能動性において、特定のものに働きかけるところからの応答的な関わりが生まれていく。
- その特に能動的な関わりを通して、関わり方がわかり、そのものの特徴を知っていく。
- それは何よりそのものへの関わりが面白く楽しく感じるからである。繰り返しを通してそのものが好きになっていく。
- その関わりをどういう形でするかは何より思いつきからである。それには単に思わず知らず動いたとか周りでそうやっけていて模倣したとか、多くの要因があるだろう。
- 思いつきでやっている内に、こういうことを実現したいという先が見えてくる。

- それを実現しようとする。簡単にいかないときに試行錯誤し、工夫し、粘り強く取り組む。
- このようにして現れてくるあり方を「資質・能力」と呼ぶ。このようにして、資質・能力は主体的な活動の具体化となっていく。それを媒介するのが遊びとそれを繰り返す循環過程である。（私は愛と知の循環と呼ぶ。）
- その循環が様々な園の環境において起こるときに、対象の種類に応じて関わり方の違いがあることに気付いていく。人と物、生き物ともものは異なる呼応関係を必要とする。そこでこの環境のあり方の種別を内容領域として整理しておき、その種別に応じて主体的な関わりつまり資質・能力の発揮の姿を分けておきたい。それを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として整理する。
- そこからさらに、そのような姿としての関わりのさらに先に潜在的に関わり可能であろうような多くのことが広がっていくと感じるようになる。（それを諸々の世界への旅立ちと私は呼ぶ。）

5. 主体的な活動は資質・能力のプロセスの実現により可能となる

- 幼児教育はその「見方・考え方」に基づいて構想されている。
- 幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになることが、幼児期の教育における見方・考え方である。
- このように身近な環境に出会い、主体的に関わり、そこから関わり方や意味を見出すために試行錯誤し考えていくことを幼児教育と呼ぶ。
- その主体的な活動のあり方を具体化したものが資質・能力である。感じたり気付いたり、分かたりできるようになったりする「知識及び技能の基礎」、考えたり試したり工夫したり表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、心情、意欲、態度が育つ「学びに向かう力、人間性等」である。
- 心情とは環境への出会いによって起こる驚きや不思議さや面白さや素敵さの感情であり、それが環境にあるもの・人・事への関わりへの意欲を引き出し、関わりつづけようとするのである。
- 保育内容の5つの領域に応じて資質・能力の展開は変わっていく。例えば、砂場と小動物の関わり方は大きく異なるが、それなりに主体的な関わり方が生まれていく。
- そこで、保育内容に応じて資質・能力の展開としての幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）として整理し、特に年長児の育ち・学びを捉える視点とした。大事なことは資質・能力の表れであること、こどもの具体的な様子であること、保育の改善の視点としていくことである。

6. 幼児教育・保育は「小さい」が「大きい」となる仕組みの発明による

幼児教育・保育に特徴的なことはそれが「小さいこと」にあると思う。どういうことか。

- 当然ながら、ごく小さい年齢である。多少以前まで、そこに預かりはあっても、教育は成り立たないとされていた。そして実際に小学校以上の教育とはだいぶ異なるものとして実践されてきた。その大きな特徴は日常の日々の小さな出会いから教育を始めようということである。だが、そういうちょっとしたことで何か学ぶということはあるのか。その小さなことを長期的に起こるであろう学びそして成長につなぐいくつかの仕組みを実践的に発明してきたからである。それが幼児教育の150年以上の歴史なのである。
- 第一、園という環境の中に学びへと至るであろう物・人を用意し、そこへの出会いを通して興味をかきたて、活動へと誘う。その物・人はほとんど無数に近くあり得る。特定の主な教材というアプローチから環境での多くの潜在的素材という捉え方に転換した。
- その理由は二つから考えられる。一つは子どもの学びとは実に多岐にわたり、しかも相互につながりあっており、特定のいくつかだけが重要だとすることは出来ないと気付いたこと。もう一つは小さな出会いでの繰り返しが肝心で、ある特定のことに一定の時間集中させることは相当な手間が掛かり、しかも効果が乏しいことを見出したことによる。
- 第二、そうすると、むしろ幼い時期の学びとは生活すること、生きること、そのものに関わるのであり、極めて幅広い全人性とつながるということであるが。同時に、その方法として単に全人的に生活することを可能にするということではなく（それは方法以前のあり方とくだんのこととがそこに起こらない）、園という環境を作り、そこに子どもたちと幾人かの保育者がいて、そこに子どもと環境への出会いが起こり学びの経験に進むという方式を発明したのである。

- 第三、では、出会いから学びへとどう至るのか。その要になるのが遊びであるということが重大な発明だったのである。太古の昔から幼い子どもは遊びをしていたに違いない。その遊びを拡張し、学びへと至るであろう経験の場と変えたのである。それは出会いによって特定の学びにつながるのではなく、その出会いから遊びとして子どもの思いつきの活動を行うことで環境的また自己の関わりの潜在可能性を発見していくこと（知と呼びたい）と楽しさ（愛と呼びたい）とを重ねることと、さらにその思いつきから少し先に実現したいことを思いついて実現するように務める機構が働くことを発見した。そこに自発的な活動としての遊びという概念が成立したのである。
- 第四、遊びはあくまで思いつきであり、多種多様な活動を次々に行う仕組みであるが、それが継続していくことで学びの経験につながるだろう。それは遊びで実現したいことが生まれそれを目指すという短期の課題解決を長期的な探索とそこでの新たな課題の発見につないでいく仕組みをそこに導入したことによる。そこに保育者の直接的あるいは環境的援助が働き、課題の目標を実現するという意味での活動が長い時間での活動となり、それが繰り返し行われる活動の「循環」過程を作り出すこととなったのである。この活動の循環という仕組みが学びを保育者の援助を呼び込み、学びの経験を保証していくのである。

7. 保育者と子どもとの間の信頼関係という情愛に基づく見通しのベースを育てる

- 保育者は子どもとの安定した愛着関係を育て、子どもの安心を確保する。さらに安全基地としてまわりの環境への関わりを支える。
- 子どもがまわりの環境を探索し、その子なりの遊びを自発的に始めるとともに、その子どもが保育者がつききりでなくてもやっていけると保育者は見定める。同時に、子どもが保育者を折りに振れて参照し、ヒントや手助けや支えを求めるが、なおかつ自分でやろうとするようになる。それが保育者と子どもとの間の信頼関係の構築である。
- 保育者はそのような信頼関係という心情的な結びつきと子どもの活動への見通しが立つところを頼りにして、幾人もの子どもの保育を進める。

8. 環境的暗黙知により保育の半分は進められる

- 幼児教育・保育でとりわけ顕著な特徴は、その環境におけるもののあり方と配置に伝統に応じたまたときに創設されるものの持つ暗黙知によった保育がなされるということがある。必ずしもその意義を保育者として(ときには研究者も)その意義を把握していないが、でもなんとなく面白そうで、夢中になって遊ぶからそのものを置いておく、そしてその時間を大事にするということである。
- そこに楽しさがあり、夢中になることがある。発見があり、工夫が起こる。さらに土や砂や水などの特徴を発見する。そういうことは園の環境の至る所にあり、至るものにあるのではないか。もちろんそこを考える保育者・研究者・設計者がいることは確かであるが、でも、多くの人にはなんとなく楽しそうで良いと思うから環境に置いておく。作り替える。
- こういう出会いを作りたいから、こういう場を用意し、この種のものを用意し、こんな具合に子どもたちの関わりに関与し、援助するとは限らない。いや、そういう発想で決まっていく保育の動きは半ばであり、後の半ばはそこにある環境の中でいわば自ずと起こる。子どもが意図するわけでもないし、保育者の意図でもなく、ともあれ立ち現れていく。自己生成されるのである。ある程度は想定できるが、常に具体的には思いがけないことが起こる。

- それは、遊びが起こるから、それは思いがけないことをするような思いつきだからである。相互作用的に偶発的なことが起こるような余地が高い。さらに環境にあるものに半ば頼っているだけに、予想しかねるし、予想できることを超えた方が面白くなると保育者は考えている。むしろ起きてきたことを捉えて、それをさらに深める援助を工夫する方が保育としてよいものになりそうだと経験的に思っている。
- このあたりは小学校以上の教育と著しく異なっている。まさに乳幼児期の教育の特徴だ。それは単に予想外の出来事や関わりが起こることではない。そこに子どもの新たな発見があり、工夫が生まれ、そこに素材からの学びの深まりに向かうことが見られる。そこに開かれた関わり方が保育における保育者の姿勢となる。
- そういうあり方を環境的暗黙知とその活用と呼ぼう。面白そうな素材があり、道具があり、教材があるので、使ってみて、そこからさらに面白くする援助へと持って行くやり方である。そのペダゴジーの発見は日本の幼児教育・保育の偉大な伝統だと思うのである。

9. 心情・意欲・態度から始まる

- 心情・意欲・態度というあり方が幼児教育の根幹である。それは身近な環境への関わりにおける心情的動きから始まる。
- 心情は、出会いにおける感情・感覚であり、それは不思議、面白さ、謎、素敵さ、というものだ。身近な環境にある諸々からいわば呼びかけが起こり、それに呼応して出会うのである。そこから環境への感性が育つ。意欲をかき立て、関わりたくなる。その心情が起こることが子どもをまわりの世界へとつなぐ。
- 心情から意欲へ、そして態度に発展する。意欲とは能動的に関わるあり方へと転じることだ。態度とは自分なりにやりたいことをイメージして実現するときの姿勢である。このようにして活動への推進力が生まれる。
- そのプロセスに沿ってやりたいことの実現のために工夫しつまり考え、またその物事の特徴に気づくだろう。思考と知識の基礎が育っていく。

10. 自発的な活動としての遊びとは何か

- 遊びとは(幼児教育にあっては)自発的な活動を指す。それは遊び的活動が自ずと現れるということを行っている。それは思いつきとして不意に生まれる。だから楽しい。同時に、物事の可能性を広げることにもなる(大部分は無駄にしても)。
- 遊びからやってみたい、実現したいことが生まれる。ちょっと先の実現を目指す。遊びを通して活動が転換し、そこにやりがいと充実感を感じる。それが目標志向となり、その工夫と達成のパワフル感を感じることになる。
- 遊びからの目標は勝手に思いついて決めるもので、いつでも、その目標の変更・発展をやれ、何度も試せる。試行錯誤が充実した探究・追究となっていく。
- そこから、やり方や物事の特徴について発見し、結果的に学ぶ。

11. 愛と知の循環性、好きになることと理解していくことが保育の要である

- 子どもはまわりの環境すなわち世界に対して、心情としてつながる。
- 心情の受動性（環境への素敵とする感性の広がり）と、能動性（愛し関わる）の両面が生じていく。
- まわりの世界が好きになり、濃密な感情がそこに広がる。それを「愛」と呼べる。
- また子どもは知的な関わりによって世界へとつながる。
- 知性の受動性（まわりに起こる物事の特徴に気付く）と能動性（物事を利用し目標に向けて考える）の両面が生じていく。
- そのもの自体への特徴への関心が広がっていく。特徴の関連がつかめる、発展する先を考える。

12. 対象への関わりから諸々の世界へと旅立つことが幼児期の終わりに起こる芽生えである

- 物事の理解とその意味を考えるとところから、その種のものが構成する世界への見通しが生まれる。その世界へと探究していく。
- 例えば、積み木からそのような構成する活動の世界へと広がる。
- 数えることから数量の世界(いくらでも大きくなっていく数の系列)へと広がる。
- ごっこから共に演技し配慮し合う社会的なあり方の社会へと広がる。
- 絵本の物語から空想の世界へと広がる。
- そのような様々な世界への始まりが幼児期に起こる。
- その世界への導きへのいわば招待状が幼児の園環境にちりばめられ、子どもに誘いかけ、子どもは導かれる。
- その先にはまだ未知のいずれ探索するであろうところが見通しとして見えてくる。そこに「世界性」が成立する。それは未知の世界への魅惑と挑戦とそこでの知的道具と発見が待っているところである。

13. 園の質の向上と経営の維持可能性へ

- 子ども一人一人という視点が何より重要である。
- 幼児教育におけるカリキュラムマネジメントの導入，カリキュラムの柔軟化。
- 環境の構成の子どもへの呼びかけ可能性と柔軟性と多様性を増す。
- 経営意識を理事長・園長が持つこと。・
- 学びと育ちの様子を保護者に伝える。
- 世間へ広く発信する機会を作る。
- 保護者等々を同志としていく。
- 園長、保育者等の役割を確実に遂行し、その上でその協働する風土を育てる。
- 子育て支援を超えた地域コミュニティとの結びつきとそこでの利潤の確保が必要である。

信頼される園を作ろう

- 園の本分は子どもの保育にある。
- 子どもを安全に気分良く預かり、保護者に戻すこと。
- 子どもが日々落ち着いて楽しい経験をしていること。
- 子どもの生活そして遊びから子どもが学び、成長へとつながっていること。
- 乳幼児期に必要なことの多くを満たしていること。友達と仲良くする。身体を動かす運動を楽しむこと。ものを使って工夫すること。絵本に親しむこと。集団の中の行動が行えること、等々。
- 小学校に入って、順調に進んでいけることの準備が整うこと。
- 保護者の心配にいつでも応じてくれること。
- それらのことが保護者に理解され、さらに地域へと広がること。

経営の維持可能性を高める

- 経営的安定は補助金だけでは不足していく。
- 園児の確保と持続が何より重要である。その規模に見合った園のあり方とする。
- 園の経営の多様化を進める。いくつもの収入源を確保する。
- 保育者の職種を増やし、融通を可能にする。
- 保育者を育成し、また離職者をつなぎ、部分的な仕事を委嘱するようにしていく。
- 園の規模に応じて、保育室、テラス、園庭の多様なあり方と魅力を作り出す。
- 家族経営を脱し、家族以外の有能な人を登用する。

保護者・地域のニーズに応じ、ニーズを作り出す

- 保護者の潜在的ニーズに応じて最大限の工夫をする。それは常に変化し進化する。
- 地域の存在価値を高める。その園がその自治体として特色があり、優れたところだと認知させていく。
- あらゆる発信の機会を捉え、機会を拡大する。
- その園の保育を求め転入してくるところを目指す。
- 妊娠期から学童期、さらにその先までに応じた場を増やしていく。特に乳幼児期のニーズのすべてに応える努力を進める。
- 多くの各種の専門家の助言・支援を広げていく。
- 中核は乳幼児の保育・教育である。子どもが楽しく幸せで、活動に充実感を感じ、毎日ワクワクした思いで登園し、良かったという思いで降園することを実現していこうとする。

幼児教育・保育の基本に戻り、その質を高めていこう

- 幼児教育・保育の考え方を確認し、その充実を図る。
- 子どもがワクワクとして毎日園に通うようになる。
- 保育者もそれが楽しみで働く。
- 保護者はその様子を見ていきつつ、子どもの成長に喜ぶ。
- 保育の質の向上はその保育を見直し、環境のあり方を多様にし、子どもの遊びに応じて指導計画を手直しして、子どもの遊びを豊かにし、そこでの学びの経験を確認し、広げることである。
- そのため、園内の保育者・職員同士の対話を広げて、時間を確保すると共に、その多様な視点を資源（リソース）としていく。



東村山むさしの

第二認定こども園 STAFF 保育園



ANNIVERSARY

50th

ありがとう！10,000フォロワー

… 温故知新、豊かな環境の園内。深き価値観を呼び戻し、広く素敵に感性を子どもたちの心に育みたい …

第一：東村山むさしの幼稚園 (幼稚園型認定こども園) 対象：満3歳児～5歳児・定員 270 名 (0歳～2歳の各種教室あり)

歴史ある就学前幼児教育の継承と実践はもちろん、預り保育や子育て支援にも充実。認定こども園認定を受けた「私立幼稚園」。
預り保育は第二施設と同日設定。日・祝・年末年始を除き年間を通して 7:00～19:00 の間ご利用可能。

第二：東村山むさしの保育園 (保育所型認定こども園) 対象：0歳児～5歳児・定員 135 名 (うち1号児6名)

主体性を尊重しつつ、乳幼児期に育みたい土台、思考力・言語能力・運動能力・芸術能力などを育む豊かな経験が可能な「私立認定保育所」。
乳児から幼児までの姉妹園との連携による環境活用や多彩な専科指導の実践、また、グループにて行われている様々な課外教室のチョイスも可能。

東村山むさしの STAFF 保育園 (企業主導型・内閣府所管) 対象：0歳児～2歳児・定員 12 名

ワークライフバランスの実現に向けた教員保育士や法人従業員の子どもの保育所。地域枠あり。
本園に隣接。あらゆる環境を共有。恵まれた環境のもと、安心できる就労と子育ての両立を支援することを狙いに設置。

- #認定こども園 #乳幼児教育保育 #総合施設 #雑木林 #グラウンド
- #自然研究観察園 #ICT支援室 #音楽室 #図書コーナー #顔認証セキュリティ
- #2歳児・満3歳児学級 #2歳児クラブ #1歳児クラブ #ベビークラブ
- #実習・研修 #看護師 #管理栄養士 #臨床心理士 #哲学対話

- 【各種習い事】
- #美術 #プログラミング #英語 #サッカー #体操 #新体操 #剣道 #ピアノ

- 【HM-GROUP】#街づくり
- #就職&転職相談 #起業支援 #多様な働き方推進 #飲食事業 #アパート完備
- #Shop #Cafe #Marche #コワーキングスペース #イベント #研修 #コンサルティング

乳幼児教育保育・地域子育て支援拠点の総合施設。三園と付帯事業を機能的に集約。あらゆるハード&ソフトを共有することで、多彩な機能展開や資質の向上を実現。
好奇心をくすぐる、より多様で豊かな環境の中で、家庭では味わえない様々な体験をしつつ、子ども達が心豊かにたくましく生きる力、生涯にわたる人間形成の基礎を培っていきます。

【ご視察・取材は 2023 年 4 月より受入可。転職・就職のご見学&ボランティアは常時受付可。】 学校法人野澤学園 189-0025 東京都東村山市廻田町 2-14-1 TEL:042-394-4536



ANNIVERSARY 50th



東村山むさしの



学校法人野澤学園



特定非営利活動法人 全国認定こども園協会 関東地区理事・東京都支部事務局